

大会コントローラー報告

大会コントローラー 落合 公也

実施規則によれば、大会コントローラーの主な任務は、インカレ実施規則が遵守されていることを確認することである。その実施規則は昨年 3 月に改正され今回が初めての適用となった。初めてなだけに自分自身も実行委員も戸惑いながら、語句ひとつひとつの使い方から確認をしながら大会を迎えることができた。競技は提訴がでるほどの問題は生じずに終えることができた。トレイン、地図、コースにおいてインカレとしてふさわしいものであったと思う。

今回のトレインは関西らしく山あり藪ありであった。しかし走行可能度および技術的要求度の高いところをつなぐことによって、インカレとしてふさわしいコースとなった。リレーにおいては 8 年前の奈良インカレと同じ範囲であり、コースプランナーにおいては相当な苦労があった。

そのコースはクラシック、リレーともにウィニングタイムは規則どおりであった。男子のコースはある程度の予測がたったのだが、女子のコースについてはトップ選手と同等の力で走れる人材の不足で、はっきりと検討できなかったものよくまとまった。

地図は「デジタル」と「アナログ最高峰」の競演と唄われただけあって、2 枚とも最高の出来映えとなったと思う。クラシックは実行委員会によるコンピュータを用いた作図で、リレーは R.M.O-Service によるペンによる従来方法の作図であった。このキャッチフレーズのおかげか、「アナログ最高峰」の地図は通常よりも細部の仕上げが丁寧だったようだ。また今回の地図で特筆すべきは、競技に使われなかった部分についても十分な調査がおこなわれており、インカレ後の利用に自由度の高さが保証されていることである。インカレのために用意されたレベルの高い地図を今後利用することが可能となる。このことはインカレの地方開催の意義のひとつではなかろうか。

何はともあれ今回のインカレを無事に終えることができた。この成功は実行委員一人一人の熱意によるものだ。とりわけ今回は実行委員の人数も少なく職人グループとしての献身的な地図作成、運営があった。本当にインカレの舞台裏での実行委員の働きには頭がさがる。インカレ成功のために、雪のなかを月の光で調査することが実際にあるのである。

これらのことを裏返すと少人数で仕事をこなしていかなければならないほど、人材が不足しているといえる。このことは人材が決して十分でない地方でのインカレの開催の危機を意味して私やることにしたはいいいけども、やる人がおらず一部の人間に仕事が集中し廃人を養成しているだけであった、なんてことになったらインカレの運営にたずさわる人がいなくなってしまう。

今大会での残念なことは 1 名の失格者をだしたことだ。開会式の当日に、要項 1 で広告した立入禁止区域に入ったことによる。失格とされた者は 1 年生であり、事情を把握しきれていない部分もあったかもしれない。一個人が失格となったのであるが、本質は所属する大学の指導の未熟さ、甘さの露呈である。全ての大学において学生に対する規則の一層の

周知をお願いしたいが、今回のことは一大学に責任があるとも思えない。

この原因が広く世の中一般における風潮にあるならば仕方がない。けれどもインカレを続けていくために我々は極めて基本的な社会常識を知っていなければならない。昨年、愛知県では大学生のある団体がパーマネントコースを利用した際に、自分たちで設置したコントロールなどを撤収せずに放置して社会問題となったが、社会常識の欠如が事態を引き起こしたといえる。このことが世の風潮なのなら一步間違えれば我々の組織のなかでも起こりうることである。他山の石として日本学連においては人づくりの視点をもってもらいたい。

大会コントローラーの大役は私には力不足でとても満足につとまるものではなく、細部でチェックしきれずに競技者にもご迷惑をおかけしたところがあった。それでも多くの方々のご協力でつとめを果たすことができた。実行委員はじめご協力くださったみなさんと、貴重なこの機会を与えてくれた技術委員会には感謝に絶えない。